
Ashy Wish

shiraka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ashy Wish

【Nコード】

N3858BA

【作者名】

shiraka

【あらすじ】

此の岸と彼の岸の狭間には、代々エンマと呼ばれる者がいた。居場所を失った魂を裁くのがその者の役目だった。裁くといっても大層なものではなく、人々の魂を白か黒か、もしくは灰色の途に区分することだった。白の途は善人に、黒の途は悪人に与えられる。そして、灰色の途はそのどちらでもない者に与えられる。自分の手で、自分を殺した者に。

別サイトににて掲載中（重複掲載）です。

序章

そこは何もない場所だった。

目に見えるのは、果てない川と空。

拓けた箇所^{ひら}に立ちすくむ自分と、もうひとりの青年だけだった。

一陣の風さえ吹かないその場所は、どことなく淋しくて、肌寒さを感じた。

暖かな太陽の光が大地に与えられることはなく、何処までも何処までも暗さを携^{たず}えていた。

オレは川から視線を外し、後方にいる青年に向き直った。

明るい茶髪に、空と同じ色の瞳。年はよく判らないが、二十歳前後と言ったところだろう。人懐っこい感じで印象は良いが、あの瞳が全てを見透かしているようで、なんとなく腹が立つ。

今も、そいつはオレの心境に反して、にっこりと微笑んでいる。

「……………お前は、知ってたんだな？」

濁^{かわ}いた口から発せられた言葉に、そいつが僅^{わず}かに首を傾げた。

それがわざとらしくて、余計に腹が立ってくる。

信じていたのに。

だから、安心していたのに。

「オレを、騙だましてたんだな」

「そつだよ」

悪びれた風のない口調に、何か溢れ出す衝動しゅんどうがあった。堪こらえよ
うとして、それが無意味であると判った。

もう、どうしようもないのだ。

今更、何を言っても仕方ない。

傍はたから見れば、失ったと思ったものがそつでなかったという、た
だそれだけのことなのだ。

「……なんで？ 本当のこと、言わなかったんだよ」

そいつは少し考える素振りを見せて、それから真っ直ぐにこつち
を見た。

迷いのない、澄んだ空だった。

「気付いて欲しかったから」

オレは何も言わなかった。いや、言えなかった。

何に、なんて

もう、判っていたから。

存在の行方 1 / 3

例えば、ココに空がなかったら、人は何を見上げて泣くのだろうか。

例えば、ココに大地がなかったら、人は何を踏みしめて希望を見つめるのだろうか。

例えば 人がいなかったなら。

白と黒の織り交ぜられた石材の台座には、この空間には似つかわしくない優美な飾りの施された椅子が鎮座している。自分の身体と釣り合わない、その大きな椅子に腰かけた青年は、今日一日で一生分の幸せを放り出してしまったんじゃないかと不安になるくらい、溜め息をついていた。

片手に無機質な白い書類を持ち、反対の手で混ざり気のない空色の棒をくるくると回している。

書類から緩慢な動きで視線を上げ、自らの前に立ち並ぶ人々を見て、また思いつきり息を吐き出した。

毎日毎日、人々は飽きることなくココを訪れる。

その人にとっては一度きりなのだから構わないのだろうが、彼に

とっては何千、何万回以上と繰り返されることなので溜め息のひとつやふたつ吐きたくなるのは仕方ないことだろう。

もう一度、彼は書類に目を落とした。

平鳴耕介 ひらなるいこうすけ 三十六歳 男性

家族構成は妻と幼い娘が一人。両親とは離れて生活している。

趣味は野球観戦。

四年制大学卒業後、大手衣料品メーカーに就職。昨年、係長に任命。

交通事故により死亡。

この椅子に座ってから、？エンマ？の名を継いでから、彼は否応いやあじなく人の死を見てきた。

ココは此この岸と彼の岸かのちょうど真ん中。

生と死が分かれる場所だ。

人は死んだら何処へ向かうのか。

天国なのか、地獄なのか。

それはどちらも正解で、そして間違っている。

人々がまず訪れるのは、この狭間だ。

ココで、どちらへ行くのかを審判され、次の生へと進むのだ。

？エンマ？とは言わば裁判官のような存在で、一枚の書類を基にその人がどちらへ進むべきか途みちを示すのだ。

その、為すべきことの為に、知りたくもない他人の過去を知らされ、判りたくもないような事実を受け入れさせられている。

嫌気は差すし、何度書類を引き裂いてやろうかと思ったかは判らない。しかし、それを行動に移すことは出来なかった。

彼らには、途を指し示してやらなければいけないのだ。

そうでなければ、彼らは居場所を失うことになる。

これは、彼にしかできないことなのだから。

「
縁間様？」

ふいに名を呼ばれて、彼 縁間は顔を上げた。

そこには、心配そうな表情を浮かべる補佐役の男性がいる。

自分が書類を見ている間、ずっと隣で待っていてくれたのだが、すっかり忘れていた。

「ごめん、支人。なんか、えっと、その……」

「また、いつもの考え事なんでしょう。私は構いませんが、縁間様を待ってらっしゃる方が増えてますよ」

「あー、そうだった」

嫌なことを思い出したというように縁間は一瞬顔を歪めた^{ゆが}が、ふるふると頭を振って息を吐き出すと、真面目な顔で自分の前に並んでいる先頭の男性へ視線を向けた。

「お前は、あつちだ」

左手に持っていた棒で、右側の白い途を指し示す。

その先には、遠目でもはっきりと判る純白の飛行船があった。そこへ続く途にも人々は立ち並び、乱れることなく船に乗り込んでいる。

縁間はふと視線を逆へ向けた。反対側にも同じような船が停まっている。それは、漆黒の翼を持つ船で、それにも人々は吸い込まれるように乗り込んでいた。

「……次の生も頑張つて」

口をついて出た言葉に、男性は一度頭を下げると、ゆっくりと白い船の方へ歩き出した。

その後ろ姿を見送る縁間の視界の中で、次に並んでいた人が一歩前へと進み出る。

終わることのないサイクル。

メビウスの輪のように、何処まで行っても途切れない。
判っている。

これが、？エンマ？の存在意義なのだ。

人々に途を示すこと。

全ての人が平等に次へと進めるように、途を分けること。

それが自分の仕事なのだ。

嫌になる時はある。

自分だって感情を持っているのだから。

だが、自分がやらなければココに来た人々は道標を失って、本当
に何処にも行けなくなってしまうのだ。

それは……何よりも嫌だと思うから。

だから、縁間は毎日毎日同じことを繰り返している。

書類を見て、途を示して、また書類を見て……。

たとえ、それがどれだけの苦痛を伴うとしても。

たとえ、どれ程の数の人の涙を見るときも。

それが自分の役目。誰にも託せない、たったひとつの役割なのだ。決して抗うことのできない運命であったとして、最後にそれを受け入れたのは自分自身だ。その、責任と義務がある。

だから、何度も何度も繰り返す。

それが唯一、人々を救える方法だと知っているから。

「……とはいえ、なんで三つに分けたんだらうな。どうせなら、迷わずに済むようにしといてくれればいいのに」

隣で書類を数えていた支人がそつと笑った。

「ずっと昔からの慣^なわしですから、どう言っても仕方ないでしょう」

「判つてはいるんだけどさ」

「二つなら迷いませんか？」

「いや、どうせならひとつだろ」

堂々と言い切る縁間を見て、支人は苦笑いを浮かべた。

「それだと、平等にならないのではないですか？」

「やっばりっ？」

「はい。自分の生を真つ当に生きた者と他人の命を脅^{おび}かし奪^ちった者

が同じ途を歩んでは、不平等でしょう」

縁間は、今日何度目になるか判らない溜め息をついた。

「だよな。俺もそれはそう思ってるんだけど、三つ目がな」

そう言って、縁間は白と黒の船の間にある一本の線を見遣った。

それは川だった。

空とは違う色を携えた、細く何処までも続く川。

あれも途のひとつだ。

白でも、黒でもない。

灰色の途。

「あの途も、昔からあるんだろ？」

「そう、ですね。少なくとも、私が認識している限りでは存在して
いましたね」

「父さんの時もあつた、と」

「はい。それから、私の祖父が？シト？だった時も話は聴いていま
したから」

縁間は一度頷いてみせ、ふうと息をついた。

「誰が知らんが、めんどくさいもん作りやがって」

「縁間様」

自分を窘める声たひなを聴き流して、縁間は諦めたように視線を落とした。

「……なあ、支人」

「はい。何でしょうか？」

「アレは、俺の見間違いだよな？ ほら、書類の見過ぎで瞳が疲れてるんだとか、空気の層に温度差があつて有りもしない影ができてるんだとかさ」

縁間の無茶な見解に、支人はそつと微笑んでから否定を表すように頭を振った。

「いいえ、私にも見えています。アレは縁間様の見間違いではありませんよ」

「じゃあ、ホントに……？」

「はい。本当に、です」

縁間は目に見えて判る程に、肩を落とした。

「つてことは、アレも俺の仕事になるんだよな？」

「そう、なりますね」

「だよ、な」

縁間は右手を支人に向けて差し出した。

そつと、その手に書類が渡される。

長い付き合いだ。何も言わずとも、こちらの意を汲んでくれる。

「これが終わったら行っていい？」

「はい。……あ、縁間様」

「支人、これは約束破ったことにはならないよな？」

縁間の言葉に苦笑いを返しながら、支人は「なりません」と答えた。

覚えているのは、クラクションの甲高い音と耳に響くブレーキの音。

それらがまるで夢であったかのように、ココは静かな場所だった。

何も無い。

そう言ってもいいくらいに、辺りを見回しても目に付くものはなかった。

有るものと言えば、遠くの方に綺麗な白い飛行船と歪な形をした黒い軍用機みたいなのが見えるくらい。それから、すぐ近くで灰色の水が流れていることくらいだ。

なぜ、自分はこんな所にいるんだろうか。

どうやってここに来たのかも、どうしてここにいるのかも判らない。

だから、ただ、灰色の川を眺めることしかできなかった。

「なあ、ココで何してんの？」

その声をかけられたのは、一体どれくらいぶりだろうか。そんなに時間は経っていないはずなのに、すごく久しぶりのように感じた。

声の主を見ると、その人は自分と同じくらいの年齢に見えた。せ

めて、二十歳前後だろう。

金髪のような明るい髪、空と同じ瞳の色が強く印象に残った。

綺麗な色だ。

「質問に答えてくれない？」

その男は、不機嫌そうに眉を寄せた。

はっと我に返って、口を開く。

「あ、ごめん。えっと、その……オレにも判んないんだけど」

「……………はあ？」

ちょっと語尾が上がって怖い声になった。

ガラの悪い先輩に絡まれた気分だったが、何がどうなってるのか判らないのは事実なのだ。

判らないものは判らないとしか言いようがない。

「なんか、気付いたらここにいて……だからホントに、オレにも判んなくて、ええっとだから……」

しどろもどろになりつつ、なんとか現状を説明しようとしたが、どう言えば判ってもらえるのかさえ判らない。

どうしようもない自分が、堪らなく情けなくなってきた。

男はじつと、自分を見ている。クスリとも笑わず、射^いるような視線が痛い。

ここは自分のいるべき場所ではないのだろう。

まるで歓迎されていないように感じられる。

このまま、回れ右をしてここから離れたい。

そう思ったが、ここが一体どこなのか知らない上に、帰り方も判らないのではどうしようもない。

今、ここで頼れるのはきつとこの人だけなのだ。

ちょっと怖いけれど、この際それは無視しよう。

「あ、あのお」

なんとか頑張って口にした言葉は、どことなく震えていた。

ホントに情けない。

「何？」

男が僅^{わず}かに首を傾げた。ちゃんと、話を聴いてくれるらしい。

たったそれだけのことが、すごく嬉しかった。

「ここ、どこか教えてくれない？」

「何処だったらいいと思う？」

質問に質問で返されてしまった。

それに律儀に答えようとすると、この口が恨めしい。

「どこだったらって、えっと……自分んち」

「有り得ないな」

「……です、よね」

「お前の家の中には、こんな川があんの？」

「まさか！ あるわけないじゃん」

「ま、実際考えて有り得る訳がないよな」

どこだったらいいかって訊かれたから、正直に答えただけなのに。

これでは、自分がすごくバカみたいではないか。だが、この人は口で勝てそうにない。沸き起こる感情を宿めて、質問を繰り返す。

「それで、ここは一体どこなんですか？ オレ、家に帰りたいんですけど」

「家に帰る？ 正気？」

「え？ いや、正気も何も普通帰るでしょ？」

相手はまた首を傾^{かし}げて、何を言^いってるんだというような表情を浮かべている。

こっちの方が、訳が判らない。

「気付いてないのか」

「はい？」

「それなら教えてやるしかないな」

初めからそうして欲しかったんだけど。

出かかった言葉は喉元辺りで止めておいた。言^いってしま^まって、教^{おし}えてくれないということにでもな^なったら大事^{だいじ}だ。

「ココは、狭間だよ」

「はざま……って、何？」

「狭間は狭間さ。あの世とこの世の、ね」

「……………え？ ええっと、それはつまり？」

「単純明快に答えてやろう。お前は死んだらしい」

「死……って、うそ!？」

「俺が嘔吐^{おうと}いて、何かメリットがあるとでも？」

「いや、そんなことは……って、知らないけど。ホントに？ マジで？」

「ホントに。マジで」

そんなこと、あるわけがない。

自分が死んだ？

そんなの……だって、こんなにもはっきりと身体感覚が判るのに。

死んだ奴がその後どうなるのか知らないから、何がどうであればいいのか判らないけど、でも……。

「あ！ もしかして、これ夢なんじゃ……」

「確かめてみる？」

そう言うなり、男は持っていた棒で思いっきり頭を殴ってきた。

それが、ものすごく痛くて、これが夢ではないことを知った。

「せめて、先に言ってからに……」

「油断が入るから判り易いことだってあるんだよ。まあ、これで判つたろ？」

「……うん」

本音で言えば、判りたくなかったのだが。

なんで、オレは死んだんだろう。

何があっただろう。

覚えているのは、確か……。

「お前、名前は？」

「は？」

「だから、名前」

「えっと、雅也^{まひぢ}。橋本雅也^{はしもと まひぢ}、です」

男が初めて笑みを見せた。花が咲いたような、そんな温かで優しい笑みを。

「雅也、ね。俺は縁間^{えんま}」

「エンマ？ まさか、閻魔大王^{えんま だいおう}……とか？」

彼は答えずに、ただ微笑んだ。それはさっきまで浮かんでいたのとは少し違う感じのする笑みだった。

雅也はまずいことを訊いてしまったのではないかと不安になったが、縁間は特に何も言わなかった。それが、余計に怖い。

「あ、あはは。そ、そんなわけ……ない、よねえ。バカだなあ、才
レ」

乾いた笑いが喉の奥を揺らした。

縁間が呆れたように、それでもまた笑ってくれた。

そこは灰色の川と呼ばれる場所だった。

呼ばれると言っても、呼ぶのは縁間や支人といったココの住人だけだったが。

川に近付くにつれ、アレにも近付くことになる。

だんだんと、その姿を判断できるようになった。

椅子に腰掛けていた時から、一応その姿が何なのか薄々気付いてはいたのだが、どうせなら違っていて欲しかったと思うのはいけないことだろうか。

縁間と支人が「アレ」と称したのは、人だった。それも少年と呼んでいくらしいの人物だった。

日に焼けたらしい髪は少し茶色く、肌も同じようになっている。スポーツを何かやっていたのだろうか。爽やかな印象で人に好かれそうだ。

しかし、縁間にとっては関係なかった。

自分達の知らない内にやってきて、しかも灰色の川の近くに立ち尽くしているなんて、何がそうしているのか考えるだけでも億劫だ。

救うべきは人の魂であり、救われるべきは惑う心だ。

途みちを示してやれるのは自分のみ。

結局、これも何かの縁なのだろう。

「なあ、ココで何してんの？」

縁間つとは努めて明るい声で、少年に声をかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3858ba/>

Ashy Wish

2012年1月14日00時58分発行